



日本水大賞

JAPAN WATER PRIZE

水の惑星—地球を形容するのにこれほど適した言葉はないでしょう。水は自然界を循環し、地球上あらゆる生物の生命を育み、生存を支え、汚染を浄化してきました。特に日本においては古来より美しい水を誇り、私たちはその恩恵に浴してきました。私たちはこの美しい水を次世代の子どもたちに受け継ぐことができるでしょうか……。

平成 10 年 6 月、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる 21 世紀の日本と地球を目指し、水循環の健全化に寄与することを目的として、日本水大賞顕彰制度委員会（委員長 東京大学名誉教授、国連大学上席顧問 高橋 裕氏）が設立され、事務局が公益社団法人日本河川協会内に置かれました。第 7 回から日本水大賞委員会に名称を変更し、第 12 回より委員長は日本科学未来館館長で宇宙飛行士であった毛利衛氏となり現在委員 13 名及び特別委員 6 名で構成されております。また、第 17 回より国土交通省が主催者として協働しております。

日本水大賞委員会は、水循環の健全化に寄与する個人、諸団体の地道な研究活動を応募、顕彰し、広く全国に紹介、啓発するための「日本水大賞」を主催し、第 1 回日本水大賞の表彰式・受賞活動発表会が平成 11 年 3 月に秋篠宮同妃両殿下のご臨席を仰ぎ盛大に開催されました。また秋篠宮殿下におかれましては、平成 17 年 5 月より日本水大賞委員会名誉総裁にご就任されております。

第 1 回の日本水大賞は大賞の他大臣賞として建設大臣賞、国務大臣環境庁長官賞（当時）が贈られました。その後第 3 回（平成 13 年 5 月）から厚生労働大臣賞、第 6 回（平成 16 年 6 月）から農林水産大臣賞及び文部科学大臣賞、そして第 8 回からは経済産業大臣賞が加わり、水環境行政に関わる全ての 6 省から贈られるまでになりました。また、第 4 回（平成 14 年 5 月）からはスウェーデンで開催される青少年を対象とした権威ある国際コンテスト、ストックホルム青少年水大賞に参加する日本代表の選考を兼ねた日本ストックホルム青少年水大賞（青少年研究活動賞から改称）が設けられました。2004 年の日本代表、沖縄県立宮古農林高等学校はアジアで初めての大賞（グランプリ）を獲得しました。また、2006 年は京都府立桂高等学校、2018 年は青森県立名久井農業高等学校がそれぞれ準グランプリを獲得しました。



今年で第 23 回となる日本水大賞は、これまで応募総数、延べ 4,350 件（日本水大賞 3,997 件、日本 SJWP353 件）に達し、大賞以下表彰された個人、団体は、延べ 352 件（日本水大賞 306 件、日本 SJWP46 件）を数えます。後援をいただくのは、水循環政策本部、外務省、文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省の他、関係 34 団体。協賛企業は 7 社 1 団体であり、日本における水環境問題を研究活動する全ての個人、団体を対象とした唯一の賞として、多くの活動される方々の励み、目標となり、広く国民に水循環の健全化の重要性を啓発する機会として発展を遂げてきました。

対象範囲

(1) 対象となる活動の内容（活動分野）

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような分野における諸活動（研究、技術開発を含む）を対象とします。

①水防災：

- ・防災教育、住民避難の円滑化への取り組み
- ・水防災に対する安全性の向上に資する技術の開発・普及等

②水資源：

- ・水を大切にする取り組み、山や川などの水源を大切にすることを等

③水環境：

- ・川や湖沼、海などの水をきれいにする取り組み、水辺や水のある地域づくりを行う活動
- ・水にかかわる体験活動、環境学習等
- ・生き物の保護や生物多様性の保全に資する活動（「水循環系の健全化」の視点が含まれるものに限る）

④水文化：

- ・水や川、湖沼や海などに対する敬意と親愛を高める活動
- ・水や川、湖沼や海などの文化を創り、広める活動（芸術、文学を含む）、地域における水文化の発掘や普及等

⑤復興：

- ・上記①から④に該当する活動のうち、地域の復興の視点から実施されるもの

※その他、上記①～⑤に関する国際的な連携・技術協力・学会活動

(2) 対象となる活動主体

水循環系の健全化に寄与すると考えられる活動で、以下のような方々が実施する諸活動を対象とします。

なお、個人、法人、グループの種別、年齢、職業、性別、国籍等を問いません。



日本水大賞の内容

対象となる活動の中から、優れたものに対して、以下の賞を授与し、広く公表します。

①大賞【グランプリ】（賞状・副賞 200 万円）

水循環の健全化を図る上で、活動内容が幅広くかつ社会的貢献度が高く、総合的見地から特に優れたものに対して授与します。

②大臣賞【国土交通大臣賞】【環境大臣賞】【厚生労働大臣賞】【農林水産大臣賞】【文部科学大臣賞】

【経済産業大臣賞】（賞状・副賞 50 万円）

各省の行政目的に関係の深いものの中から、特に優れたものに対して授与します。

③市民活動賞【読売新聞社賞】（賞状・副賞 30 万円）

市民活動の中から、特に優れたものに対して授与します。

④国際貢献賞（賞状・副賞 30 万円）

活動の範囲や効果が国際的であり、人・文化・技術の日本との交流も含め、大きな功績をあげていると考えられるものに対して授与します。

⑤未来開拓賞（賞状・副賞 10 万円）

国内外を問わず水分野における新たな展開を対象とし、特に優れたものに対して授与します。

⑥審査部会特別賞（賞状・副賞 10 万円）

活動がユニークなものなど、審査部会において特に表彰に値すると判断されたものに授与します。

⑦日本ストックホルム青少年水大賞（賞状・副賞 20 万円及び国際コンテスト参加の渡航、滞在費用）

20 歳以下の高校生または同等の学校に在籍する生徒又はその団体での研究活動から優れたものに授与します。その他、審査部会で表彰に値すると判断されたものは、委員会での承認を経て、優秀賞及び審査部会特別賞が授与されます。

第23回日本水大賞 各賞一覧（応募総数133件）

各 賞	活動 主体	都道 府県	活動の名称	活動主体の名称
大 賞	団体	山口県	アグロフォレストリーによる水循環の再生と農村開発	特定非営利活動法人 シャンティ山口
国土交通大臣賞	団体	福井県	上・下流住民の交流による地域連携型で自然と人間の共生を目指すドラゴンリバー交流会	特定非営利活動法人 ドラゴンリバー交流会
環境大臣賞	団体	北海道	人工湿地の継続的な維持管理による温室効果ガスの削減と河川維持管理コストの低減	十勝川中流部市民協議会議
厚生労働大臣賞	行政	兵庫県	千苅貯水池流域の水源環境保全の取組み	羽束川・波豆川流域水質保全協議会
農林水産大臣賞	学校	福岡県	絶滅危惧種ニホンウナギのサンクチュアリづくりを通じた2つの地域創成～ニホンウナギの飼育から見えてきた森里海連環の重要性について～	福岡県立伝習館高等学校 自然科学部
文部科学大臣賞	学校	愛知県	学校周辺の水域を生かした持続可能な教育活動の推進	豊田市立西広瀬小学校
経済産業大臣賞	企業	広島県	セネガル無電化地域へのソーラーポンプシステムの導入	テラル株式会社
市民活動賞	団体	和歌山県	孟子不動谷稲作水系復元・保全活動と、モニタリングを中心とした流域環境教育	特定非営利活動法人 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子
国際貢献賞	行政	滋賀県	琵琶湖モデルを活用したベトナムのハロン湾・カットバ島沿岸水域の水環境保全支援	滋賀県庁
未来開拓賞	学校	福岡県	排水溝から油回収及び二次利用法の検討	北九州市立大学 国際環境工学部エネルギー循環化学科・環境生命工学科
審査部会特別賞	個人	富山県	「月刊グッドラック」による松川を活かした“水の都・とやま”再生への挑戦	中村 孝一
審査部会特別賞	団体	大分県	中津干潟の保全活動	特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会
タイムリー賞	団体	福岡県	命を守る災害報道の実現を目指して～防災・減災に関わる関係機関の協働～	九州災害情報（報道）研究会

第23回日本水大賞委員会 委員名簿

名誉総裁 秋篠宮皇嗣殿下		
役 職	氏 名	所 属・職 名
委員長	毛利 衛	日本科学未来館 館長
副委員長	松田 芳夫	公益社団法人日本河川協会 会長
委 員	赤星 たみこ	漫画家・エッセイスト
委 員	浅枝 隆	埼玉大学 名誉教授
委 員	大垣 眞一郎	東京大学 名誉教授
委 員	岡田 光正	放送大学 副学長
委 員	岡村 隆吉	一般社団法人日本経済団体連合会 廃棄物・リサイクル部会長代行
委 員	櫻野 泰則	一般社団法人日本建設業連合会 環境委員長
委 員	進士 五十八	福井県立大学 学長
委 員	田中 隆之	(株)読売新聞東京本社 常務取締役編集局長
委 員	谷田 一三	大阪府立大学 名誉教授
委 員	名執 芳博	特定非営利活動法人日本国際湿地保全連合 相談役
委 員	村田 和夫	(株)建設技術研究所 代表取締役会長
特別委員	栗田 卓也	国土交通事務次官
特別委員	中井 徳太郎	環境事務次官
特別委員	樽見 英樹	厚生労働事務次官
特別委員	枝元 真徹	農林水産事務次官
特別委員	藤原 誠	文部科学事務次官
特別委員	安藤 久佳	経済産業事務次官

第23回日本水大賞審査部会 委員名簿

役 職	氏 名	所 属・職 名
部会長	浅枝 隆	埼玉大学 名誉教授
委 員	浅羽 雅晴	科学ジャーナリスト
委 員	安藤 茂	公益財団法人水道技術研究センター 理事長
委 員	池田 裕一	宇都宮大学地域デザイン科学部 教授
委 員	太田 進	公益社団法人におい・かおり環境協会 事務局長
委 員	小俣 篤	公益財団法人河川財団 参事
委 員	風間 ふたば	山梨大学大学院国際流域環境研究センター 教授
委 員	金沢 緑	関西福祉大学大学院教育学研究科 教授
委 員	久保 成隆	東京大学 名誉教授
委 員	佐藤 俊彰	(株)読売新聞東京本社 編集局科学部長
委 員	重 政子	特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議 代表理事
委 員	清野 聡子	九州大学大学院工学研究院 准教授
委 員	高木 宏明	一般社団法人日本環境衛生施設工業会 専務理事
委 員	玉岡 かおる	作家・大阪芸術大学 教授
委 員	中北 英一	京都大学防災研究所 教授
委 員	森 誠一	岐阜協立大学経済学部 教授
委 員	山田 正	中央大学理工学部 教授

【大賞】（副賞 200 万円）

活 動 主 体	NPO法人 シャンティ山口 (団体・山口県)
活 動 名 称	アグロフォレストリーによる水循環の再生と農村開発
活動の動機・背景	ラオス内戦でタイ国内山岳部に逃れた難民が生活苦を余儀なくされている。森林樹木の伐採とトウモロコシ栽培により土壌流出が進んでいる。村の共同トイレはし尿を地下浸透処理していたため伝染病が蔓延し、多くの老人や幼児が死亡していた。崩壊寸前の貧困の各村を対象に新しい農業手法で住民の自立を促し、持続可能で希望の持てる生活を目標に農村開発を展開することが必要である。
活 動 の 概 要	① 森林再生事業 森林伐採と大規模なトウモロコシ栽培により水源枯渇、洪水頻発、農薬による健康被害が発生していた。トウモロコシのモノカルチャーからマンゴーやアボガド等の果樹へ転換することで森林再生を通し、水環境の改善、安全な生活と地域環境づくりを目指している。 果樹の収穫までには5～7年を要するが、収穫を迎えると定期的に収入も増加し、地産地消で安定した生活が確保され始めている。 ② エコトイレ普及開発事業 電気不要、汲み取り不要、ガスは収集し燃料として使用、臭気なし、浄化排水は畑の肥料等の機能を持つエコトイレシステムを開発し、84基を設置。施工は、全て現地の利用者が携わり、その過程で住民のコミュニティーや学習意欲達成感に加え、愛着と清潔の持続の習慣づける指導を行っている。これにより安全な飲料水が確保された。保健衛生や健康管理等の身近な知識の向上のため定期的に地域を巡回し、検診・治療・健康相談や生活環境セミナーも実施している。
評 価 ポ イ ン ト	トウモロコシのモノカルチャーからアグロフォレストリー（森林農業）への転換により、民生の安定とコミュニティーの活性化を目指している。SDGs時代のモデルとなる活動。農業による健康被害、農地の破壊から果樹栽培への転換によって村落を立て直し、出稼ぎを解消するまでこぎつけたことは素晴らしい。果樹への転換による森林再生とエコトイレ普及開発はいずれも水環境改善につながる。地域のニーズに対応した長年の地道な活動が結実している。東南アジアでの日本の貢献、プレゼンスを示す点からも高く評価できる。
参 考 情 報	国際活動が大賞を受賞することは初めてだが、活動を具体的なSDGsの一環として評価することに異議はなく、選定された。

【国土交通大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	NPO 法人 ドラゴンリバー交流会 (団体・福井県)
活 動 名 称	上・下流住民の交流による地域連携型で自然と人間の共生を目指すドラゴンリバー交流会
活動の背景・動機	社会経済活動等の変化により流域文化圏が崩壊し、再構築が必要となっている。流域の一体化を図り、災害に強い自然豊かな活力ある地域づくりを行い、素晴らしい水系環境を構築して次世代に引き継ぐことを目指して活動を行っている。
活 動 の 概 要	九頭竜川流域における水環境の保全を目指し、「水を創り、水を活かし、水と生きる」を理念に様々な活動を行っている。 ・水源地環境保全を目的に真名川ダム上流域等での会員が播種・育苗したドングリの植樹、河川の清掃、川流れやカヌーなどの川遊び、水生生物調査などのイベントを通じた上流・下流住民の交流活動を活発に行い、参加者も 13000 人と多数。 ・九頭竜川流域の素晴らしさを再認識するため、講演会、フォーラム等を開催。 ・福井市治水記念館における指定管理者として河川行政や水防災についての広報業務。 ・国土交通省九頭竜川防災センターにおける治水・利水・環境・防災や鳴鹿大堰に関する説明・広報。 ・平成 26 年 3 月に、近畿地方整備局の河川協力団体としての指定を受け、河川法に基づく業務を実施。 ・平成 29 年度からは新しいテーマ「減災」に取り組み、水災害から命を守る「逃げ遅れ 0」を目指した「マイタイムライン」の普及活動。
評 価 ポ イ ン ト	・「流域治水」の概念と一致しており、河川の流域を一貫して上流から下流まですべて活動対象としている。河川敷だけでなく堤内地もすべて対象にして、しっかり活動している。非常にバランスがとれており、様々なことにチャレンジしている。 ・流域連携の元祖のような団体であり、環境保全や防災などしっかりした内容の様々な活動を行い、参加者は 13000 人と多数。四半世紀を経過し、アクティブに活動を続けている。 ・流域は今後のキーワード。流域の上下流のつながりを大事な理念として、大きな流域全体を対象に活動している。 ・水環境の保全活動により、上流と下流の住民の交流の場が創出されている。
参 考 情 報	

【環境大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	十勝川中流部市民協働会議 (団体・北海道)
活 動 名 称	人工湿地の継続的な維持管理による温室効果ガスの削減と 河川維持管理コストの低減
活動の背景・動機	十勝川中流部にある人工湿地において地元高校生と連携して生物調査を行っているが、河川内の湿地であるため増水による土砂流入と水際部の樹林化が問題になっている。 流入土砂を撤去して水域を確保するとともに、河道内の樹林再生抑制による温室効果ガスの削減と自然環境の多様化等を図る。
活 動 の 概 要	・十勝川の高水敷の再樹林化を防止するために掘削された人工湿地を適切に維持管理し、再樹林化を防止するため市民協働により土砂の撤去や伐採を行うほか、環境保全のための播種や調査等を実施している。 ・湿地における SDGs の取り組みとして、2030 年までに排出される温室効果ガスの 45%削減や、環境の多様化による生息生物種数の 26%増加の維持等を目標として活動している。 ・土砂撤去等の作業に当たっては、重機の稼働を抑制し温室効果ガスの発生抑制を図っており、2020 年時点で目標を達成している。 ・湿地造成前には 215 種であった生物種は、湿地による環境の多様化により生息生物種の増加が図られており、270 種が確認されている。今後も湿地内の調査を継続し、自然復元の技術的基礎データを収集する。(水域にタンチョウの親子の飛来が確認されている) ・湿地の維持、再樹林化防止を行うことにより、少なくとも 20 万円程度の河川維持コストの縮減にも寄与している。 ・ガマ群落についても、復元可能な量しか獲らないというアイヌ民族の知恵に学び、ガマの生息地の拡大が図られている。
評 価 ポ イ ン ト	・取り組みに当たり CO₂ の削減が意識されているとともに、湿地環境を保全することでタンチョウの生息地となっている。 ・氾濫原湿地は極めて生物多様性の高い場所で、欧米では氾濫原湿地の保全は重要な課題。樹林化対策よりも氾濫原湿地の保全の観点から評価する。 ・抽水植物であるガマについては復元可能な量しか採らないという知恵に学んでいるが、これはまさに生物多様性条約の目的の一つである「生物資源の持続可能な利用」であると考える。 ・湿地環境の多様化により生息する生物種の増加を数値で表している点は評価されるが、具体の報告がなされるとさらに良かった。 ・具体的な目標を設定して地域参加で取り組んでいる点も評価。
参 考 情 報	

【厚生労働大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	羽束川・波豆川流域水質保全協議会 （行政・兵庫県）
活 動 名 称	千刈貯水池流域の水源環境保全の取組み
活動の背景・動機	神戸市最大の水道専用貯水池である千刈貯水池に流入する羽束川・波豆川を良質な水道水源として確保することと、河川及び周辺地域の環境の保全に寄与すること。
活 動 の 概 要	自治体だけでなく流域住民の方々と協議しながら以下の活動を行っている。 ・啓発普及事業 神戸市民向けの「水源探訪バスツアー」。 神戸市と羽束川・波豆川流域の住民が合同で、親子での水生生物観察イベントや貯水池の清掃活動を実施。 流域周辺の 2000 世帯に対し、「流域だより」を年 2 回発行。 ・生活排水対策事業 合併浄化槽処理区域である羽束川流域の世帯に対し、浄化槽の保守点検及び清掃費用の助成。 ・河川環境美化事業 河川の清掃活動や地域環境美化活動等への助成と不法投棄防止看板の設置。
評 価 ポ イ ン ト	水道事業者が水源の水質保全の観点化から流域住民とともに活動することは国内でもあまり例がない。合併浄化槽の適切な管理の支援をはじめ様々な活動を行っている。流域の三田市や宝塚市とも連携して活動している点も評価したい。 自らの水源を、水質保全の観点から、水道事業者と流域住民、関連市が一緒に取り組んでいるユニークな取り組み。
参 考 情 報	

【農林水産大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	福岡県立伝習館高等学校 自然科学部 (学校・福岡県)
活 動 名 称	絶滅危惧種ニホンウナギのサンクチュアリづくりを通した 2つの地域創成 ～ニホンウナギの飼育から見えてきた森里海連環の重要性 について～
活動の背景・動機	地域創生を目的として、柳川掘割と飯江川の2つの地域で絶滅危惧 種であるニホンウナギのサンクチュアリづくりを行う。
活 動 の 概 要	・2014年からニホンウナギの保護を目的として特別採捕、飼育中の 生体実験、標識放流を行った。 ・2018年にウナギの水槽にクスノキ落葉を入れると死亡率が激減 することを発見し、これにより飼育中の死亡率が激減した。 ・2019年からは飯江川上流の広葉樹の植林を視野に入れた農業と 生物多様性が共生できる川づくりと地域創生に取り組んでいる。 ・2020年10月までに6241匹を放流し、その後のモニタリング等 で成長が確認されている。 また、桜舞館小学校の総合学習や山川町総合文化祭においてウナギ を含めた生物多様性の重要性について講義を行っている。
評 価 ポ イ ン ト	農林水産大臣賞は、今まで水産の視点で評価できるものがあまりな かったが、日本人の食文化とも関係が深く、地域づくりにも貢献し ており、評価した。 ウナギの飼育中にクスノキの葉を入れると死亡率が激減すること を発見し、その脱窒効果を解明したのは素晴らしい。これは前回授 賞以降の成果であり、前回の文部科学大臣賞受賞時よりかなり進の 展もある。
参 考 情 報	第20回日本水大賞 文部科学大臣賞受賞

【文部科学大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	豊田市立西広瀬小学校 (学校・愛知県)
活 動 名 称	学校周辺の水域を生かした持続可能な教育活動の推進
活動の背景・動機	「飯野川を昔のようにきれいで遊ぶことのできる川にしたい」という児童の願いから飯野川の清掃活動を開始した。45 年余りの活動の中で、学校周辺の水域を活かした 3 つの常時活動からなる本校独自の環境教育となり、地域や企業の支援も頂きながら活動している。
活 動 の 概 要	昭和 50 年の飯野川清掃から始まり、翌年には河川の水質汚濁調査へと発展した。平成 24 年からは丸根山ビオトープに着手するなど 3 つの常時活動を行っている。これらをもとに 6 年間で学校周辺の水を取り巻く里山の自然を満遍なく学習できるカリキュラムを作成し、教育活動を行っている。中心となる活動は以下の通り。 ・ 矢作川の水質汚濁調査 5・6 年生が採水し、透視度、パックテストによる COD 測定を行い、測定値の公表と市役所への送信を行っている。測定は 16000 日を超えており、地域の協力の下で実施している ・ ビオトープ自然観察 放棄水田を活用したビオトープにより、1 年生は生物の種類や数調べ、3 年生は魚類や植物の観察、5 年生は生物の観察・飼育を行っている。 ・ ムササビの生態調査 6 年生は、生態系の頂点に立つムササビの巣箱を設置し、校内のステーションから遠隔観察している。 これらの活動は、企業、地域、保護者の支援により実施されている。
評 価 ポ イ ン ト	6 年間の環境教育全体計画のもとで、体系的な取り組みを長期間にわたり行っている。地域や地元の企業等との連携も図られている。マンネリ化した学校教育の中で新たにカリキュラムを組み直して活動している。学校教育でこれだけのことをやっておられて、影響力も大きい。これを参考に他校でも活動が発展し、大きなうねりになることを期待する。
参 考 情 報	第 1 回日本水大賞 審査部会特別賞受賞

【経済産業大臣賞】（副賞 50 万円）

活 動 主 体	テラル株式会社 (企業・広島県)
活 動 名 称	セネガル無電化地域へのソーラーポンプシステムの導入
活動の背景・動機	無電化地域にソーラーパネルと直流駆動ポンプを組み合わせたシステムを導入することにより、水へのアクセス環境の向上を図る。給水の自動化により、井戸から手汲みで生活用水を確保し生活向上に資することができる
活 動 の 概 要	・ソーラーポンプシステムの導入 セネガル・ルーガ州チェップ市の無電力地域 16 集落に、JICA「中小企業・SDG s ビジネス支援事業」としてシステムを設置。 ・安全な水利用に関する啓発活動 井戸蓋の設置、家畜除けの防除柵、飲用前の煮沸等の啓発活動。 ・ポンプの維持・管理体制の構築 集落の村長を責任者として運営体制を構築するとともに、配管工に研修を行うことによりトラブルや異常時に地域内で解決できる仕組みを整える。 ・途上国等への日本の技術の発信 新たに開発した直流駆動ポンプにより太陽光エネルギーで井戸等の水源から水を汲み上げるシステムを、同様の地域へ普及させるためのショーケースとして位置付けて技術を発信。
評 価 ポ イ ン ト	企業の本業部分で貢献しており、SDG s の取り組みが重要性を増す中で途上国支援のモデルとなる活動。無電源地域における課題を解決する可能性があること、現地の状況に見合った方法で地道に導入を進めていること等进行评估。 アフリカ諸国における気候変動がもたらす水資源の偏在化に対応可能な賞賛すべき活動である。
参 考 情 報	

【市民活動賞】（副賞 30 万円）

活 動 主 体	NPO法人 自然回復を試みる会・ビオトープ孟子 （団体・和歌山県）
活 動 名 称	孟子不動谷稲作水系復元・保全活動と、モニタリングを中心とした流域環境教育
活動の背景・動機	耕作放棄水田の増加に伴い稲作水系が寸断され、水環境上の問題が生じている。これらの新たな活用方途を探り、流域の水環境の健全性を回復させることは重要で緊急性の高い課題である。 また、生物多様性の保全のために計画・実践にかかわることのできる「自然環境リテラシー」を持つ人材の育成も喫緊の課題である。
活 動 の 概 要	耕作放棄地の増加に伴い、溜池・水路・水田よりなる耕作のために人為的に浚渫された水の循環（稲作水系）が寸断され、水系に依存する動植物が減少傾向にあるため、稲作水系の動植物の生息環境の復元・保全を行っている。 ① 稲作水系復元活動 ・完全無農薬による水田耕作の実践。 ・水田に水を供給する泥底の水路群の浚渫・管理。 ・休耕田を活用した浅水性の水辺ビオトープの創生（ふゆみず・なつみずたんぼ）。 ・休耕田を活用し、水辺ビオトープ群（とんぼ池）を浚渫することによる保全活動。 ② 水域生物モニタリングを中心とした流域環境教育 ・幼稚園児、小学生、中学生の段階に応じ、よりレベルの高い水域環境教育を実施。 ・これらの活動に参加した若者の中から水辺の自然環境の研究・教育に携わる若手の研究者を複数輩出。
評 価 ポ イ ン ト	耕作放棄地を無農薬の稲作に転換という未来遺産運動が、内閣総理大臣賞をはじめとする多くの表彰・評価につながっている。内容も充実しており、実践的な活動で環境教育を継続し、子供たちの問題意識を育てている。里山の活動としてもすぐれている。 活動に参加した若者の中から水辺の自然環境の研究・教育に携わる若手研究者を輩出するなど学術的活動は評価できる。
参 考 情 報	

【国際貢献賞】（副賞 30 万円）

活 動 主 体	滋賀県庁 (行政・滋賀県)
活 動 名 称	琵琶湖モデルを活用したベトナムのハロン湾・カットバ島沿岸水域の水環境保全支援
活動の背景・動機	多くの開発途上国では、湖沼や湾、河川等の公共用水域に未処理の生活排水が排出されることによって深刻な水質汚濁が発生しており、それらを防止することが喫緊の課題となっている。 琵琶湖の保全を通じて産官学民に蓄積された技術やノウハウに基づく総合的な取り組みである「琵琶湖モデル」をハロン湾地域に移転することにより水環境課題の解決に貢献する。
活 動 の 概 要	琵琶湖との類似性を持つ閉鎖性水域であるベトナムのハロン湾とその沿岸地域において、経済成長と水質環境保全を両立するためのノウハウである「琵琶湖モデル」を活用して、水環境課題の解決に寄与するため、以下の活動を実施。 ① 観光島カットバ島の水環境改善に向けた協働体制づくり JICA の草の根技術協力事業を活用し、産官に対する研修、小中学生への環境学習等を通じ、産官民の水環境保全と産業育成に取り組む機運が醸成された。 ② ハロン湾地域のグリーン成長推進プロジェクト JICA 技術協力プロジェクトを活用し、環境汚染型産業から低炭素・環境負荷低減型産業への移行を目標とした活動を実施。 省レベルでの基金、補助金等のインセンティブ付与、湾内への直接負荷管理の強化、グリーン成長白書の公表、持続的な観光促進。
評 価 ポ イ ン ト	自治体が直接、国際貢献をすることを評価。 流域の経済成長と水質保全を実現させる「琵琶湖モデル」をベトナムに適用して、そのノウハウで技術支援を行うことにより効果が出ている。世界の内湖のつながりの中で、先進的に進めてきた自負と使命の下で活動しており、9 年間の活動の後、グリーン成長のための活動支援を継続している。
参 考 情 報	

【未来開拓賞】（副賞 10 万円）

活 動 主 体	北九州市立大学 国際環境工学部エネルギー循環化学科・環境生命工学科 (学校・福岡県)
活 動 名 称	排水溝から油回収及び二次利用法の検討
活動の背景・動機	飲食店の排水溝内グリーストラップの清掃は重労働で、嫌な作業だが、これを怠ると腐敗した残さ物による悪臭など店内環境の悪化や配管のつまりが発生。 カンボジアでは、排水が河川に垂れ流し状態で、グリーストラップの整備が進んでいない。
活 動 の 概 要	①大学生協食堂の排水溝から発生する悪臭を改善するための研究を実施。 グリーストラップの水面に光触媒をコーティングした中空ボールを浮かべ、上部から紫外線を照射することで悪臭を分解する仕組みを考案し、特許出願、及び生協食堂で実証試験を実施した。 グリーストラップ内の油と残さ物の回収、および装置の導入試験を実施し、改修油の二次利用の検討を行った。 ②北九州市の支援によりカンボジアで下水処理施設が建設されている。処理場の運転開始に合わせて付近に開店する飲食店の排水溝にグリーストラップの導入試験を行う。
評 価 ポ イ ン ト	学生が問題点を発見して立ち上げ、科学的解決方法を構築し、指導教員、企業を見つけるという質と努力に満ちた活動。光触媒と紫外線を組み合わせた悪臭の防止手法を開発し、実証実験が着実に遂行されている。大学生主体の申請は少なく、高く評価したい。 地元への貢献だけでなく、海外に貢献しようとするところも素晴らしい。カンボジアでの展開に期待したい。
参 考 情 報	

【審査員特別賞】（副賞 10 万円）

活 動 主 体	中村 孝一 (個人・富山県)
活 動 名 称	「月刊グッドラック」による松川を活かした“水の都・とやま”再生への挑戦
活動の背景・動機	1970 年代初め、県都富山市の中心を流れる松川はドブ臭に覆われ、死に瀕していた。「川は都市を映す鏡であり、そこに住む人々の心をも映し出す」ことに気づき、水環境の改善には精神面を豊かにする月刊誌が必要との思いから 1977 年に「月刊グッドラック」を創刊した。 住民に水辺環境の実態を絶えず観察してもらうため、遊覧船の運航に取り組んできた。
活 動 の 概 要	「月刊グッドラック」では、住民主体で水環境を考えてもらうため、毎月、座談会を企画。創刊 100 号記念は「水と緑が一体となったうるおいのある街に」をテーマとした。 1987 年から遊覧船の運航を開始し、1992 年には飲食施設や観光案内書を併設した「松川茶屋」の建設が許可された。 2003 年には、神通川の直線化 100 年を記念して、河川局長を講師に「川と街づくり国際フォーラム」を開催。松川で「リバーフェスティバル」を開催し、リバー劇場でのショーや遊覧船によるリバーパレードは、水辺の新しい活用策として話題になった。 最大の課題である合流式下水道の改善は、委員会設置から 7 年後の 2012 年に地下貯留槽の建設に着手し、2018 年に完成した。 2017 年には、「月刊グッドラック」創刊 40 年を記念し、松川を核に魅力ある水辺の街を目指す協議会を設立した。 「水の都とやま」の魅力発信に向けて、43 年の実績を踏まえた新たな挑戦が始まる。
評 価 ポ イ ン ト	40 年以上にわたり、水の都とやまの情報発信を続けていることはすばらしい。都市河川・松川の復興の取り組みが実り、地元の一大観光資源に育てた。行政・市民連携による河辺空間づくりはよいモデルになる。川が住民の誇りとなって受け継がれていく点はすばらしい。都市の水辺再生の物語として優れている。 「川はそこに住む人の心を映し出す」などの理念を軸に、あきらめることなく住民と行政を動かしてきた取り組みに脱帽。
参 考 情 報	

【審査員特別賞】（副賞 10 万円）

活 動 主 体	N P O法人 水辺に遊ぶ会 (団体・大分県)
活 動 名 称	中津干潟の保全活動
活動の背景・動機	高度成長期に干潟の多くが埋め立てられ、そこに生活していた生物群は消失し、人々の暮らし大きく変わってしまった。 干潟環境の希少性、重要性を広く市民に伝えるため、目の前の海を「中津干潟」と名付けて環境学習、研究調査、海岸清掃、景観再生、漁業振興など地域に根ざした活動を 21 年間にわたり継続。
活 動 の 概 要	活動の中心は、中津干潟の保全であり、そのかしこい利用。さらに言えば、持続的な人と干潟の関係を再構築することにおいている。 活動の目的は、人と海の豊かな関係を取り戻すことにある。 干潟の持つ価値を人々に理解してもらい、共に保全を考えてもらうために対話を重ねてきた。 草創期には、コンクリート護岸ではなく多自然型護岸の建設を進める活動に関与し、それを実現した。 研究者にとって全く無名であった中津干潟で生物の詳細な調査を行った。 海ごみ問題に関し、ビーチクリーンや海ごみの調査をたゆまなく行っている。 環境学習や自然観察会を多数実施する中で、小学校を中心に、中学、高校、大学、社会教育とあらゆる教育の現場で講演や対話を行ってきた。 研究者や大学生達の調査活動や研究を、漁協と橋渡しし、行政機関との折衝などに側面から支援を続けている。 漁業振興についても、干潟の干満を利用した漁法である「ささひび」の復活に関与するなど、全方位的な活動を行ってきた。
評 価 ポ イ ン ト	干潟保全の活動が持続可能な生態系保全になっている。長年の活動は、自然環境共生県の地域資源として重要な役割を果たしている。 代表者にはしっかりとした理念・哲学があり、干潟の復活、子供への自然教育、アカデミアと地元との連携橋渡しなど、地道で着実な全方位の取り組みにより大きく発展している。
参 考 情 報	

【タイムリー賞】

活 動 主 体	九州災害情報（報道）研究会 （団体・福岡県）
活 動 名 称	命を守る災害報道の実現を目指して ～防災・減災に関わる関係機関の共働
活動の背景・動機	近年、大雨の局地化・激甚化が進行しており、被害を最小化するためには施設整備と併せたソフト対策の充実が重要になっている。 災害情報をより分かりやすく、切迫感とともに伝える重要性が明確化され、ダイレクトに住民に情報を伝える報道機関の役割が一層重要となっている。
活 動 の 概 要	本研究会は、防災に関係する行政機関、行政からの情報を伝達する報道機関、防災を専門とする研究者等から構成されている。 定期的に研究会を開催し、防災機関から発表される情報の意味を理解し、伝え方を研究し、わかりやすい報道の実現を目指している。 災害が迫る状況下での気象台・地方整備局の合同記者会見の実装を全国に先駆けて取り組むなど、災害報道の充実に資する仕組みづくりにも取り組んでいる。 コロナ禍における避難の呼びかけ方法やなど時流に乗った議題を機動的に取り上げるほか、アナウンサー等伝え手のスキルアップの取り組みも実施している。 令和２年度は Web 方式で研究会の取り組みを継続しており、九州のみならず全国からの参加も見られ、取り組みの共有化が進んでいる。
評 価 ポ イ ン ト	2017 年の九州北部豪雨、2020 年の球磨川豪雨など、九州で豪雨災害が多発している。温暖化の影響で災害が頻発している中、従来のやり方の視点をもう少し広げた多角的に取り組みがなされている。 報道機関や防災機関が連携して情報をわかりやすく速やかに伝えることは、災害から命を守るために必須である。災害頻発地帯の九州での先進的な取り組みで、将来は全国に広がるはず。災害報道のありかたを変革している
参 考 情 報	